

ウルク出土「獅子狩り碑」に表された直剪鑿について

藤 井 純 夫

は じ め に

筆者は以前に、レヴァント地方内陸部ステップ地帯におけるヒツジ遊牧民の成立と展開について、論じたことがある〔藤井 1997, 1998, 1999〕。紀元前 6 ～ 5 千年紀のバーディア（シリア南東部からサウジアラビア北部にかけてのステップ・沙漠地帯の通称）では、遊牧文化圏という新たな次元が形成されつつあった。そこでは、後のセム系文化の原型とも言うべき幾つかの要素が育まれていた。

ここでは更に一步進めて、紀元前 4 千年紀、つまり都市形成期におけるバーディアとメソポタミアとの関係について考えてみたい。その焦点となるのが、ウルク出土の「獅子狩り碑（Lion-hunt Stele）」である。この石碑に表された石鑿の系譜をたどることによって、都市形成期のメソポタミアにバーディアの遊牧民的要素が浸透していたことを明らかにしたい。

I 資料紹介と問題点

ウルク出土の「獅子狩り碑」について、詳しい紹介は不要であろう（図 1-a）。ここでは、幾つかの代表的な著書〔Frankfort 1954: 14; Moortgat 1969: 8-9; 小野山 1975: 72; Bas-machi 1975/76; Amiet 1980: 444; Forest 1996: 140〕を参考に、その概要を箇条書きにまとめておく。

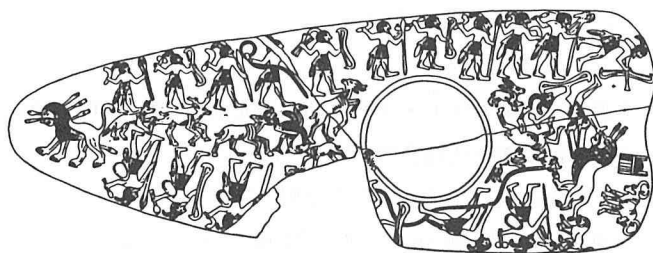
- 名称：「獅子狩り碑（Lion-hunt Stele）」
- 出土：ワルカ（ウルク）
- 年代：ウルク後期～ジェムデト・ナスル期（紀元前 3300 ～ 2900 年頃）
- 所在：イラク国立博物館（所蔵番号 23477）
- 材質：玄武岩または花崗岩（片面のみを平坦に加工）
- 寸法：高さ約 80 cm × 幅約 60 cm（ただし縁辺部に破損あり）
- 技法：浅浮彫り（主題部を囲う枠取りは認められない）
- 主題：上半はウルク王（?）による、槍を用いた獅子狩り、
下半はこれと同一人物による、弓矢を用いた獅子狩り



a



b



c

- a. ウルク出土「獅子狩り碑」(Frankfort 1954: Pl. 9-A より)
 b. メソポタミア出土円筒印象 (Moortgat 1969: Pl. A-2 より)
 c. ヒエラコンボリス出土化粧板 (Smith 1946: Fig. 25 より)

図1 直剪鋸を表した図像

碑文：なし

ウルク出土の「獅子狩り碑」は、西アジア最古の記念物の一つである。また、西アジア古代美術の特徴となった浅浮彫り技法の先駆的な事例としても、大きな美術史的意義を持っている [藤井 2000: 341–342]。しかしそれ以上に重要なのが、この石碑の持つ歴史資料としての価値である。この石碑には、ウルク後期からジェムデト・ナスル期にかけての王? (しかも他ならぬウルクの王?) の、最古の図像表現が認められる。仮にそれが王ではなく、他の重要人物であったとしても、その意義に変わりはあるまい。この図像には、メソポタミアの都市化がどのような文脈で進行したかを探る上での、貴重な手掛かりが隠されているのである。

ここで着目するのは、図像下半に表されたウルク王 (当面、ウルク王と見なしておく) のつがえる矢、特にその先端に装着された鏃の型式である。ウルク王は、先端が横に広がった特異な型式の鏃 (いわゆる直剪鏃 *transverse arrowhead*) を用いている。これは偶発的な表現ではあるまい。なぜなら、同時代のメソポタミアから出土した円筒印章 (図 1-b) やエジプト出土の化粧板 (図 1-c) にも、これと同様の鏃が表現されているからである。また、後述のように、直剪鏃の実例も同時代の多くの遺跡で出土しているからである。ウルク王が直剪鏃を用いたことは、まず間違いあるまい。

ではなぜ、ウルク王は、このような特異な型式の鏃を用いたのであろうか。そもそも、この鏃の背後には、どのような歴史的文脈が潜んでいるのであろうか。「獅子狩り碑」に表された直剪鏃の系譜を追跡することによって、ウルク王自身の系譜の一端を垣間見てみたい。

II 直剪鏃の定義

本論に入る前に、直剪鏃を以下のように定義しておく。(細) 石刃または剥片を素材とし、一方の側縁をほぼ未調整のまま、横長の先端部として利用している鏃。従って、通常の鏃のように先端が尖らず、むしろ横方向に広がっているのが、直剪鏃の最大の特徴である。技法的に言うならば、素材の主要剥離方向に直行して刃部を設けるのが、直剪鏃に固有の特徴である。なお、直剪鏃の側面は、主として腹面側からの (半) 急角度調整によってほぼシンメトリーに整形されており、一般に等辺逆台形または等辺逆三角形の形態を示す。

この定義に該当する石器は、実は、非常に多い。西アジアの先史文化を通観してみると、直剪鏃は前後 3 回盛行したことが分かる。最初は、終末期旧石器文化の主として中頃 (レヴァント編年で言うジオメトリック・ケバラ文化)。次が、土器新石器文化の前半 (メソポタミア編年で言う、ブレ・ハッスーナ文化～ハラフ文化)。そして最後が、銅石器時代末から前期青銅器文化にかけての時期 (同じくメソポタミア編年で言う、ウルク後期～初期王朝期) である。とは言え、直剪鏃の使用がその後に途絶したわけではない。例えば、シリアの

中期青銅器時代の遺跡テル・ハディーディ Tell Hadidi からは、3 点の黒曜石製直剪鋸が出土している [Miller 1983]。またエジプトでは、少なくとも新王国時代まで直剪鋸が使用されたことが判明している [Clark et al. 1974]。しかし、これらは後続の時期におけるやや散発的な事例に過ぎない。直剪鋸が広域かつ濃密に分布したのは、やはり上述の 3 つの時期であろう。

ここで重要なのは、3 回の直剪鋸盛行期が時期的・地域的に連続していない、ということである。例えば、第 1 期（終末期旧石器文化中盤）の直剪鋸と第 2 期（土器新石器文化前半）の直剪鋸との間には、永い空白が介在している。しかも、両者の分布域は互いに異なっている。後述するように、第 2 期（土器新石器文化前半）の直剪鋸と第 3 期（主に前期青銅器時代）の直剪鋸についても、時期的な断絶と分布域の移動が認められる。従って、3 つの時期の直剪鋸は、それぞれ別の系統に帰属する可能性が高い。この点をまず確認しておきたい。

さて、本稿で検討するのは、第 2 期および第 3 期の直剪鋸である。第 1 期の細石器的な直剪鋸 (trapeze, triangle) は、検討の対象から除外する。第一に、時期が大きくかけ離れている。第二に、製作技法が異なる。第 1 期の細石器的直剪鋸がしばしばマイクロ・ビュラン技法を用いているのに対して、第 2 期以降の直剪鋸はこの技法を用いていない [Rosen 1997: 39; 西秋 2000 (私信)]。第三に、石器のセット関係が異なる。第 1 期直剪鋸の場合、等辺のみならず不等辺の石器も混在し、全体として一つの組み合わせ道具 (composite tool) を構成していたと考えられている。等辺のものは主に利器の先端部に、不等辺のものは主にその側面部に装着されて、一本の矢または槍を形成していたのである。これに対して、第 2 期以降の直剪鋸には、不等辺のものが少ない。等辺の石器がその大半を占めている。従って、先端部のみが単独で装着された可能性が高い（「獅子狩り碑」の鋸もその一例である）。第 1 期直剪鋸に見られた細石器的な組み合わせが解体し、先端部分だけが存続したのであろう¹⁾。矢毒の使用によって矢の威力が高まり [Clark et al. 1974: 342–345]、その結果、側面後方の刃が省略されるようになったのかも知れない。いずれにせよ、第 1 期の直剪鋸と第 2 期以降の直剪鋸とでは、直剪鋸の持つ意味・機能が異なっているように思われる。

以上の理由により、本稿では、第 2 期以降の直剪鋸（単体として用いられた、等辺逆台形または等辺逆三角形の直剪鋸）だけを検討する。ところで、直剪鋸と同様に、終末期旧石器

1) ただし、複数の石器を組み合わせた矢が土器新石器文化以降に途絶したわけではない。例えば、初期王朝Ⅲ期のマリ Mari (テル・ハリリー Tell Hariri) から出土した貝殻製象嵌板には、側面後方の刃を伴った矢が表現されている [Postgate 1992: Fig. 13. 4]。この場合の矢の先端は直剪鋸ではないが、直剪鋸を先端に含む組み合わせの事例もある。例えば、新王国時代のエジプトでは、そうした実例や図像の存在が確認されている [Davies 1913: Pl. XII; Clark et al. 1974]。また、時代は遡るが、イラン南西部マウブ・ダシュト平原の遺跡では、(先端に直剪鋸を含む) 組み合わせ道具としての矢の存在が、石器使用痕の研究によって指摘されている [安部 2000 (私信)]。

文化から前期青銅器時代まで断続的に永く用いられた石鋸として、半月形細石器 (lunate) がある [Rosen 1983; 1997: 39–44]。この半月形細石器も、直剪鋸として機能し得る。しかも、矢の先端に直交して装着され、樹脂や瀝青に厚く覆われた場合、逆台形または逆三角形の直剪鋸とほとんど区別が付かない。だとすれば、「獅子狩り碑」に表された石鋸の候補として、この半月形細石器も検討の対象に含めねばなるまい。しかし後述のように、ウルク周辺の遺跡では、半月形細石器は欠如または希である。従って、「獅子狩り碑」に表された鋸が半月形細石器であったという可能性は、当面無視できるであろう。焦点となるのは、やはり逆台形・逆三角形の（狭義の）直剪鋸である。（なお、ここでは石鋸だけを想定しており、銅鋸は想定していない。ウルク後期～ジェムデト・ナスル期の遺跡では銅鋸自体がまだ希であり、しかも、直剪鋸タイプの銅鋸は確認されていないからである。ただし、図像上段に表された槍の先端部については、銅製の可能性があらう。）

III 直剪鋸の研究史

第2期以降の直剪鋸について、研究史を簡単に振り返っておこう。周知の通り、西アジア新石器文化の編年の枠組みは、尖頭器・石鋸の型式に基づいて構築されてきた。そのため、尖頭器・石鋸の研究には、既に十分な蓄積がある [Perrot 1952; Mortensen 1970; Cauvin 1974; Burian & Friedman 1979; Bar-Yosef 1981; Gopher 1994; 和田 1987; 足立 1997 a, 1997 b, 2000]。

しかし、直剪鋸だけはやや例外であったように思われる。先に引用した一連の著書・論文においても、直剪鋸は、先土器新石器文化で盛行した尖頭器・石鋸の末端に位置する特異型式として、いわば尖頭器・石鋸文化の最後の残影として、ごく簡単に紹介されているに過ぎない。直剪鋸の研究がこのような低調であった理由としては、1) 直剪鋸の形態・技法が尖頭器・石鋸一般のそれとは異なっており、同時には論じにくいこと、2) 直剪鋸は型式的な変化に乏しいので、編年の細かい部分になると指標として用いにくいこと、3) 直剪鋸が分布する時期になると、石器に代わって、土器が編年の指標に用いられること、4) 一つの遺跡からの出土数が比較的少ないので、個別的な記述に終わりがちなこと——などが指摘できよう。

とは言え、土器新石器文化以降の直剪鋸を比較的詳細に検討した研究がないわけではない [Bar-Yosef et al. 1970; Miller 1983; Miller et al. 1982; 近藤 1989; Nishiaki 1993; Rosen 1997; Saidel 1998]。問題は、これら一連の研究が、第2期または第3期のどちらか一方の直剪鋸にのみ力点を置いていること、従って双方を比較した上での総括がまだ提示されていないこと、であろう。無論、これには正当な理由がある。地理的・時期的に断絶している両者を、あえて同一の場で論ずる必要はない。例えば、レヴァント北部の土器新石器文化について考察する場合、検討の対象となるのは第2期の直剪鋸だけである。第3期の直剪鋸にま

で言及する必要はあるまい。逆に、レヴァント南部の前期青銅器時代を考察する際には、第3期の直剪鋸だけが問題となる。第2期の直剪鋸を検討する必要はない。

しかし、両者の接点に位置する事例を検討する場合は別であろう。双方の比較を通して、考察を進めるほか無い。実は、「獅子狩り碑」に表された直剪鋸がそうなのである。後述するように、この直剪鋸は、第2期直剪鋸の地域的残存とも見なし得るし、その一方では、第3期直剪鋸の東漸例とも見なし得る。従って、ウルク王の用いた直剪鋸の系譜問題とは、そのどちらの可能性を採るかという問題なのである。本稿で検討するのも、まさにこの点である。

IV 直剪鋸の分布

まず、直剪鋸の分布を比較してみよう（図2、表1）。先述したように、第2期（土器新石器文化前半）の直剪鋸は、メソポタミア平原から北シリア・地中海北東海岸部にかけての、いわゆる天水農耕地帯を中心に分布している。これに対して、第3期（銅石器時代末～前期青銅器時代）の直剪鋸は、ナイル河流域からシナイ半島・ネゲブ地方および内陸部ステップ地帯にかけての、いわゆる乾燥域に集中している。従って、第2期の直剪鋸を農耕集落グ

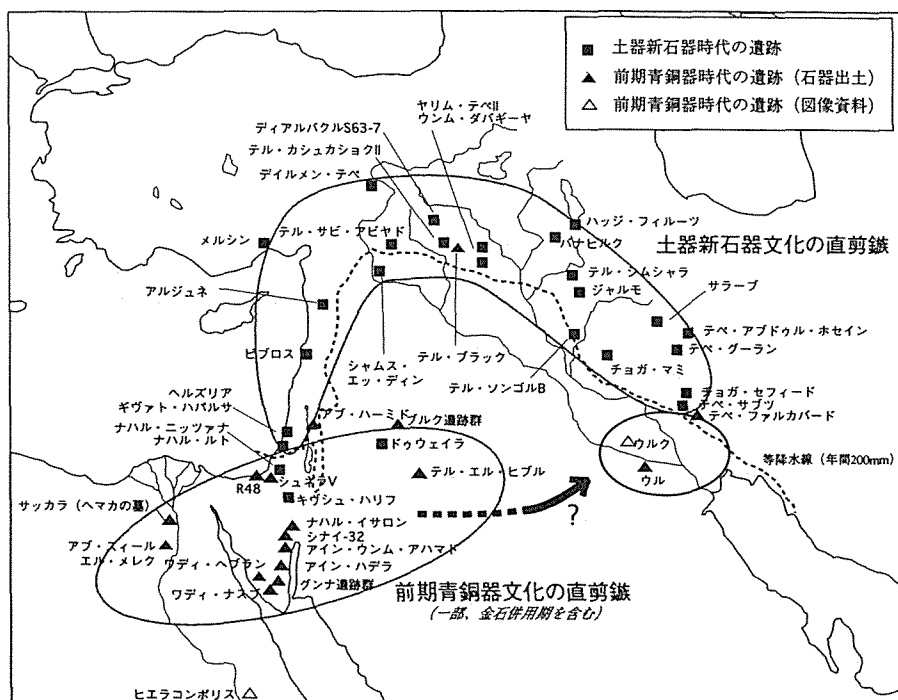


図2 直剪鋸の分布

表 1 直剪鋸出土遺跡一覧表

遺 跡 ¹⁾	資 料	層 位	時 期 ²⁾	出土数	フリント ³⁾	黒曜石	文 献 ⁴⁾
イラン (フジスタン)							
チョガ・セフィード	石器	—	セフィード期	30	28	2	Hole 1977
テベ・サブツ	石器	—	バヤト期	1	1	0	Hole et al. 1969
テベ・ファルカバード	石器	—	ウルク後期～ED	6	6	0	Wright 1981
イラン (西部)							
テベ・アプトゥル・ホセイ	石器	10 G 区表土層?	PN?	2	2	0	Pullar 1990
テベ・グーラン	石器	—	PN	+	—	—	Kozlowski 1999
サラープ	石器	—	PN	+	+	—	Pullar 1975
アジアップ	石器	—	PPNB or PN	+	+	—	Pullar 1975; Kozlowski 1999
ハジジ・フィルーツ	石器	phase A, B	前 5 千年紀後半	2	2	0	Voigt 1983
イラク (南部)							
チョガ・マミ	石器	phase 3 + 表採	サマッラ	6	4	2	Mortensen 1973
ウルク	石碑	—	ウルク後期～JN	—	—	—	Frankfort 1954
ウル (およびその周辺)	石器	—	"	+	+	+	Wooley et al. 1976
不明	円筒印章	—	ウルク～JN	—	—	—	Moortgat 1969
"	"	—	"	—	—	—	Moortgat 1969
イラク (北部)							
ジャルモ	石器	主に J-II : 1～3	PN	124	25	99	Howe 1983
ウンム・ダバギーア	石器	III-IV 層	ブレ・ハッスーナ	3	0	3	Mortensen 1982
テル・シムジャラ	石器	8 層	前 5 千年紀後半	1	0	1	Ingholt 1970
ヤリム・テベ II	石器	9 層	ハラフ (前期)	(3)	0	3	Merpert and Munchaev 1993
バナヒルク	石器	—	ハラフ	(9)	(8)	(1)	Watson 1983
テル・ソングル B	石器	II 層?	ハラフ?	1	1	0	藤井秀夫 1981
シリア							
テル・カシュカシヨク II	石器	表面・攪乱層	PN	6	0	6	Matsutani 1991
テル・サビ・アビアド	石器	5-3 B 層	ハラフ移行期	63	59	4	Copeland 1996
アルジューネ	石器	—	ハラフ	≥ 4	(4)	(0)	Unger-Hamilton 1988
シャムス・エッ・ディン・タニール	石器	—	ハラフ	1	0	1	Miller et al. 1982
テル・ブラック	石器	—	ウルク中～後期	1	0	1	Emberling et al. 1999
トルコ							
ディアルバクル S 63-7	石器	表採	ハラフ?	+	—	—	Cambel and Braidwood 1980
メルシン	石器	X XIV-X IX	主にハラフ中～後期	+	?	?	Garstang 1953
ディルメンテベ	石器	6-11 層	ウバイド?	1	0	1	Balkan-Atli 1995
レバノン							
ビブロス	石器	—	eol. Recent	+	+	—	Cauvin 1968
"	"	—	Eneol. Ancient	+	+	—	"
ミネット・エッ・グリーハ	石器	—	Eneol. Ancient	+	+	—	"
シェムラン	石器	—	Eneol. Ancient	+	+	—	"
イスラエル (海岸部・ネゲブ)							
クビシュ・ハリフ	石器	—	LN-EB	37	37	0	Rosen 1984
ヘルズィリア	石器	—	LN	+	+	0	Prausnitz et al. 1970
ナハル・イッサロン	石器	B 層	前 5 千年紀	+	+	0	Gopher et al. 1995
ナハル・ルト	石器	—	LN?	+	+	0	Lev-Yadun et al. 1989
ギバト・ハバルサ	石器	—	LN	+	+	0	Olami et al. 1977
ナハル・ニツァナ	石器	—	Chal?	3	3	0	Burian and Friedman 1987
シュネラ V	石器	—	前 5 千年紀?	+	+	0	Goring-Morris 1993
R 48	石器	—	Chal?	1	1	0	Oren and Gilead 1981
ヨルダン (渓谷)							
アブ・ハーミド	石器	—	LN	2	2	0	Dollufus et al. 1988
ヨルダン (トランスヨルダン)							
ドゥウェイラ	石器	—	LN	40	40	0	Betts (ed.) 1998
テル・エル・ヒブル	石器	—	前 4 千年紀中頃	2	2	0	Betts 1992
ブルク 02	石器	—	Chal?	+	+	0	Betts 1993
ブルク 03	石器	—	LN	1	1	0	"
ブルク 11	石器	—	Chal?	+	+	0	"
ブルク 27	石器	—	developed LN	+	+	0	"
ジャベル・ナジャ	石器	—	LN	1	1	0	"
エル・ギルカ遺跡群	石器	—	LN	+	+	0	Betts and Helms 1987

表1 直剪鋸出土遺跡一覧表(続き)

遺 跡 ¹⁾	資 料	層 位	時 期 ²⁾	出土数	フリント ³⁾	黒曜石	文 献 ⁴⁾
エジプト(シナイ半島)							
アイン・フデラ(ナワーミス)	石器	—	EBII?	103	100	0	Bar-Yosef et al. 1977
グンナ(ナワーミス)	石器	—	Late Chal.-EBII	46	46	0	Bar-Yosef et al. 1986
グンナ 25	石器	—	EBII	9	9	0	“
グンナ 50	石器	—	Late Chal.	23	23	0	“
グンナ 100	石器	—	EBII	1	1	0	“
ワディ・ナスブ	石器	—	EB?	+	+	0	Currely 1906
ジャベル・ハディド	石器	—	EB?	+	+	0	Holland 1870, 1871
ワディ・ビヤール	石器	—	EB?	+	+	0	Palmer 1871
ワディ・ヘブラン	石器	—	EB?	+	+	0	Palmer 1871
アイン・ウンム・アハマド	石器	—	EB?	+	+	0	Palmer 1871
S-32	石器	—	LN-EB?	12	12	0	Krolik 1999
エジプト(ナイル流域)							
ヒエラコンポリス?	化粧板	—	先王朝後半	—	—	—	Aldred 1965
不明(下エジプト)	浮彫	—	先王朝後半	—	—	—	Hayes 1953; Clark et al. 1974
アブ・スィール・アブ・メレク	石器	—	先王朝後半	≥ 3	(3)	0	Vandier 1952
サッカラ(ハマカの墓)	石器	—	第1王朝	+	+	0	Emery 1938; Clark et al. 1974

1) イラン高原以東の遺跡(テベ・ムシュキ, ジェイトゥンなど)を除外した。

2) PPNB: 先土器新石器文化 B, PN: 土器新石器文化, LN: 後期新石器文化, Chal: 銅石器時代, EB: 前期青銅器文化, ED: 初期王朝期, JN: ジュムデト・ナスル期

3) チャートや水晶など, 黒曜石以外の石材を含む。

4) 複数ある場合は, 最新の文献のみを挙げた。

ループ, 第3期の直剪鋸をバーディアグループと言い換えることも可能であろう²⁾。

無論, 例外は認められる。例えばヨルダン東部のドゥウェイラは, 立地的には第3期のバーディアグループに含まれるが, 時期的には第2期の農耕集落グループと並行している。シリア東部のテル・ブラックは, その逆である。時期的には第3期, しかし地域的には第2期のグループに属している。しかしこれらは例外である。両グループの中心的分布域が「肥沃な三日月弧」の内外に分断されていることは, 明らかであろう。

では, ウルクはこの二つのグループのうちのどちらに属しているのだろうか。地理的には, 第2期の農耕集落グループにより近い。しかし, 直剪鋸自体の年代が異なる。一方, 資料の同時代性という点では, 第3期のバーディアグループが有利である。しかし, 分布の中心域とウルクとの間には, 依然として大きな地理的空白が介在している。従って, 「獅子狩り碑」に表された直剪鋸の系譜問題に関して, 次の二つの可能性が成り立つであろう。地理的近接を重視するならば, 第2期直剪鋸の地域的残存ということになる。一方, 資料自体の同時代性を重視するならば, 第3期直剪鋸の東漸例と見なすことができる。

問題はどちらがより妥当かということであるが, 分布の比較だけではこれ以上絞り込めない。とは言え, それぞれの弱点部分を比較して見通しを得ることは可能であろう。まず, 農

2) イラン高原やトルクメニスタン方面の遺跡からも, 直剪鋸は出土している。テベ・ムシュキ [Fukai et al. 1973], テベ・サンギ・チャハマック [増田 1977], ジェイトゥン [Masson & Sarianidi 1972] などの遺跡がそれである。これらの事例は, 時期的に見て, 農耕集落グループの祖形または分派と考えられるが, 本稿ではザグロス山脈以西の遺跡だけに絞った。

耕集落グループとの関係では、時期的な断絶の精度（具体的には、ウバイド後期～ウルク前期における直剪鋸の有無）が問題になる。筆者の知る限り、この時期の遺跡から直剪鋸が出土したという確実な報告例はない³⁾。従って、時期的な断絶は確かに介在しているように思われる。一方、バーディアグループとの関係では、地理的空白の信頼度（具体的には、メソポタミア西方地域における直剪鋸の有無）が問題となる。確かにこの地域では直剪鋸が報告されていないようである。しかし、これは調査自体が希薄なためでもあろう。少なくとも、直剪鋸の欠如が分布調査によって十分確認されているわけではない。

以上のことを考慮すると、農耕集落グループよりもバーディアグループの方がやや有利なように思われる。しかし決定打にはほど遠い。別の側面からの検討が必要であろう。

V 直剪鋸の型式・技法

次の課題は、直剪鋸自体の型式・技法の比較である。しかしこの方法は、直接的には成り立たない。なぜなら、ウルク王の用いた直剪鋸の型式・技法が不明だからである（「獅子狩り碑」の図像からそれを読みとることは困難であり、ウルク出土の石器についても報告はない）。従って、迂回策を採るほかない。地理的・時期的にウルクに最も近いウルからの出土例が、型式的・技法的にどちらのグループに属するかについて、検討してみよう⁴⁾。

各遺跡から出土した直剪鋸を、三つの時期・地域に区分して図示した⁵⁾（図3）。繰り返しになるが、まず最初に、メソポタミア南部における直剪鋸の時期的な断絶について再確認しておこう。図の空白部分が示しているように、メソポタミアの南部では、土器新石器文化遺跡からの出土例とウルク後期以後の出土例との間に、時期的な断絶が認められる。具体的には、ウバイド後期～ウルク前期における直剪鋸の欠如である。このことは、ウルク王の用

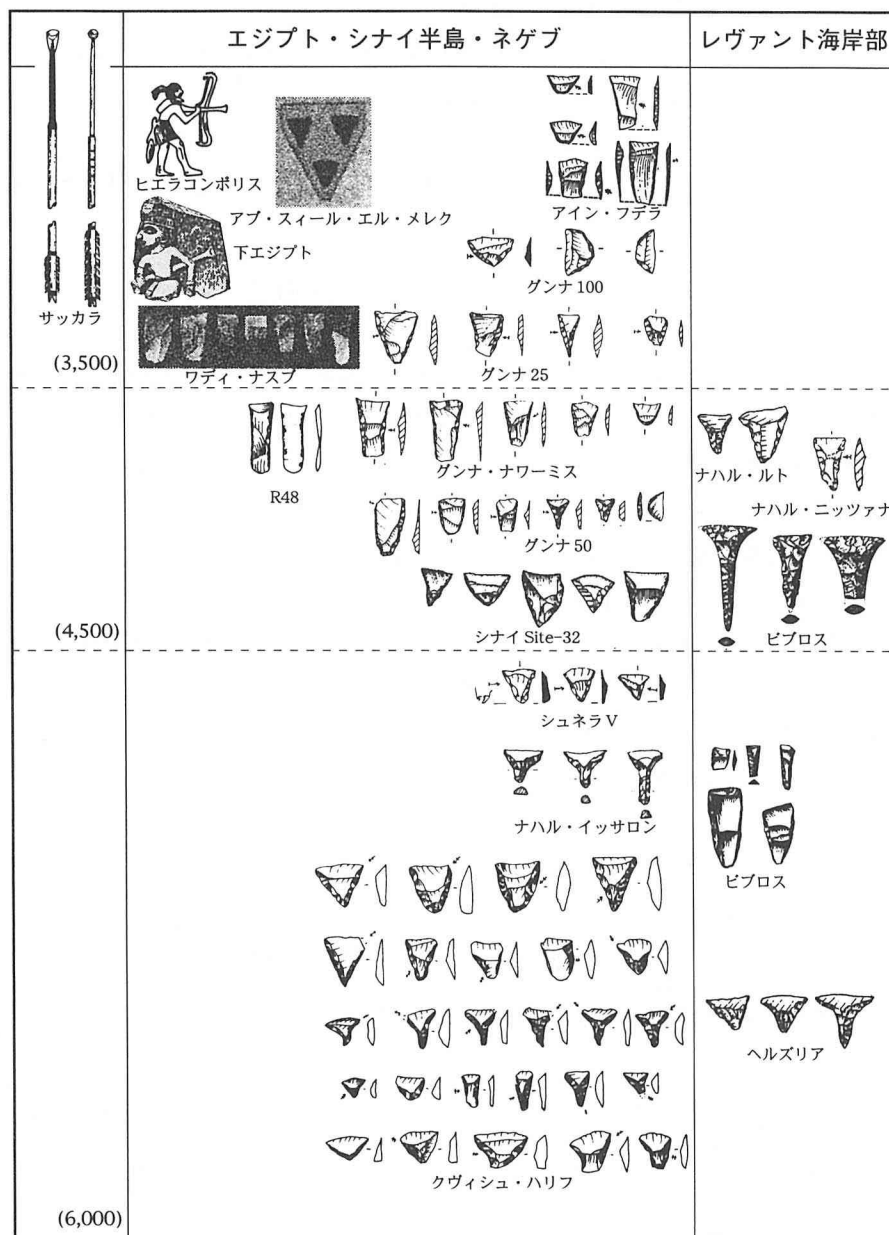
3) フジスタンのテベ・サブツやアナトリア東南部のデイルメンテベから出土した直剪鋸は、ウバイド期に比定されている [Hole et al. 1969: 77; Balkan-Atli 1995: 130]。また、ウル周辺部出土の直剪鋸の中にもウバイド期にまで遡る可能性のあることが指摘されている（特にレイジベ X 遺跡 Reijibeh X [Woolley et al. 1955: 14]）。しかし、これらの直剪鋸の時期比定には曖昧な点が残る。仮にそれが妥当であるにしても、ウバイド期の直剪鋸がきわめて希であることだけは確実であろう。

4) ただし、ウル（およびその周辺遺跡）から出土した直剪鋸がすべてウルク後期に比定されるとは限らない。註3）に記したように、ウバイド期にまで遡る可能性のある事例も含まれる。また、初期王朝時代の王メス・カラム・ドゥグ Mes-kalam-dug の墓からも、直剪鋸が出土している [Woolley et al. 1955: 14; Woolley & Mallowan 1976: 160]。

5) レヴァント南部の編年とメソポタミア編年との対比は、確定していない。そのためここでは、レヴァント側の後期新石器時代がメソポタミア側の土器新石器時代（ハラフまで）に、銅石器時代がウバイド後期に、また前期青銅器時代がウルク後期～初期王朝にほぼ対応するものとして、簡略に図示した。より詳細な区分が理想的ではあるが、バーディアの遺跡の中には時期比定の曖昧なものが多く含まれているため、暫定的な区分に止めた。

いた直剪鋸が農耕集落グループからの地域的残存ではないことを示唆している。

さて、型式および技法の比較に戻る。まず言えるのは、直剪鋸の型式・技法が意外に多様であること、従って西アジア全域を包括するような編年が成り立ちそうもないということ、

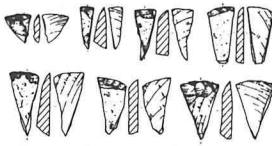
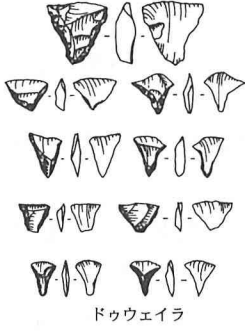
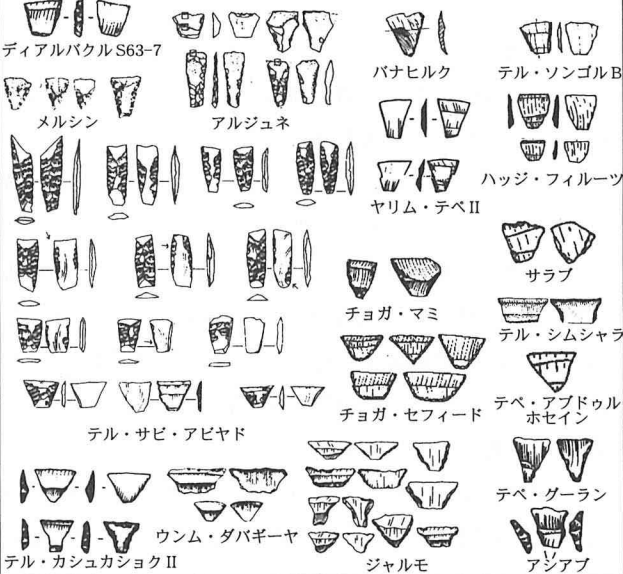


* 本文でも述べたように、バーディアの遺跡には編年の曖昧なものが多い。従って、本表も暫定的なものである。

* 縮尺は目安程度に揃えてあるが、必ずしも正確ではない。

図3 直剪鋸の

である。例えばネゲブ地方のキビシュ・ハリフから出土した直剪鋸には、複数の型式が含まれている。北シリアのテル・サビ・アビアドも、同様である。直剪鋸の大半が一括遺物として出土したにもかかわらず、そこには多様な型式が含まれている。このようなことを考慮す

内陸部	北シリア・メソポタミア・南西イラン
 (カア・アブ・トレイハ西3層)	 ウルク
 ブルク	 テル・ブラック ウル
 テル・エル・ヒブル	?
 アブ・ハーミド エル・ギルカ	 ディルメン・テベ テベ・サブツ
 ドゥウェイラ	 ディアルバクル S63-7 メルシン アルジュネ バナヒルク テル・ソングルB ハッジ・フィールツ ヤリム・テベII サラブ テル・シムシャラ テベ・アブドゥルホセイ テベ・グーラン アシアブ ウナム・ダバギーヤ テル・カシュカシヨクII ジャルモ テベ・アブドゥルホセイ テベ・グーラン アシアブ

ると、型式・技法の比較によって、ウルク王の用いた直剪鋸の系譜を割り出すことは、きわめて困難なように思われる。しかし、次のような特徴または一般的傾向を指摘することは可能であろう。

- 1) レヴァント南部の土器新石器時代から銅石器時代前半に固有の型式として、銀杏の葉のように基部が細く延びた直剪鋸（両側縁からの調整が深く入り込んで側面が内湾している直剪鋸）がある [Rosen 1984; 1997: 44]。その分布は、シナイ半島（ナハル・イサロン）からネゲブ（キブシュ・ハリフ）、イスラエル海岸部（ヘルズリア）、ヨルダン東部（ドゥウェイラ）の、乾燥地帯にほぼ限定されている。ピブロス出土の押圧剥離直剪鋸は、その特殊例と思われる。
- 2) 一方、レヴァント北部の土器新石器文化にも、固有の型式が認められる。テル・サビ・アビアドなどから出土している縦長かつ逆台形状の押圧剥離直剪鋸がそれである。ただし、その分布は北シリア（テル・サビ・アビアド）、アナトリア南東部（デイルメンテペ）、西シリア（アルジュネ）にほぼ限定されており、メソポタミア・ザグロス方面には及んでいない。
- 3) メソポタミア・ザグロス方面の土器新石器文化に特徴的なのは、やや横長の直剪鋸である。（なお、先述のテル・サビ・アビアドやアルジュネでも、縦長逆台形状の押圧剥離直剪鋸に、こうした横長の直剪鋸が伴出している）。また、背面側からの（半）急角度調整を伴う直剪鋸が散見されるのも、この地域の土器新石器文化の特徴である [Nishiaki 1993: 148]。例えば、ジャルモ、ウンム・ダバギーヤ、テル・シムシャラ、テペ・グーランなどからの出土例に、そうした事例が少数含まれている。その分布は、シリア東部（カシュカショクⅡ）にも及んでいる。
- 4) 一方、銅石器時代末～前期青銅器時代のバーディアグループでは、総じて縦長の直剪鋸が多い。ウルからの出土例もこれに含まれる。
- 5) 従って、少なくともメソポタミア方面では、横長の直剪鋸（第2期）から縦長の直剪鋸（第3期）へのシフトを認めることができる。
- 6) その背景には、素材（tool blank）の違いがある。土器新石器文化グループ（特にメソポタミア・ザグロス地域の遺跡）の場合、（細）石刃を利用したものが多い。そのため、刃部と中央稜線が平行であり、全体的に形の整ったものが多い。これに対して、バーディアグループの直剪鋸では、剥片の利用が目立つ（乾燥域では後期新石器文化の段階から既にその傾向が認められる）。このグループの直剪鋸の形態がしばしば不定形であるのも、そのためであろう。なお、剥片利用の特殊例として、カア・アブ・トレイハ西遺跡出土の皮質付き直剪鋸（cortical transverse arrowheads）がある [Fujii 2000]。
- 7) 素材の違いは直剪鋸の大きさにも反映している。土器新石器文化グループの直剪鋸は一般にやや小型であるが、バーディアグループの直剪鋸にはやや大型のものが含まれ

る。ただし、刃部の幅自体はそれほど変化していないように思われる。変化したのは、主に基部の奥行きである（その背景として、装着法または装着材の変化が予想される）。

さて、ウル出土の直剪鋸は、全体に縦長であること、主に剥片を利用していること、そしてやや大型であることなどの点から、バーディアグループの系譜に連なるものと考えられる。基部中心の侵形剥離という点でも、バーディアグループ（ネゲブのナハル・ルトやナハル・ニツァナ、あるいはヨルダン東部のエル・ギルカやブルク）との関係が予想される（なお、テル・サビ・アビアドなどから出土した押圧剥離直剪鋸では、基部を調整しないまま残すのが一般的である）。ヨルダン東部に類例があるという事実は、ウルクとの地理的な関係からも、きわめて示唆的であろう。

ウルクはウル近傍の遺跡である。ウル出土の直剪鋸による間接的な類推が許されるならば、「獅子狩り碑」に表された直剪鋸にもやはりバーディアグループからの影響が及んでいるものと予想される。実際の所、ウルク周辺の自然環境自体も、バーディアグループにより近い。獅子狩りが行われたのがウルク西方のステップ地帯であったとすれば、なおさらこの両者の関係は強いものと思われる。

VI 直剪鋸の石材

石材の違いも、重要なヒントになる。ただし、ここでも前章と同じ問題が介在する。「獅子狩り碑」に表された直剪鋸の石材は分らない。また、ウルク出土の石器についての情報も欠いている。そこで再びウルからの出土例を参照すると、ウル出土の直剪鋸はすべてフリント製である [Woolley et al. 1955: 185–187]。従って問題は、二つのグループのうちのどちらがフリント主体であるか、という点に絞られる。

結論は明らかであろう（図4）。バーディアグループの直剪鋸には、黒曜石製のものが含まれていない。すべてフリント製である。これに対して、土器新石器文化グループの直剪鋸には、しばしば黒曜石製のものが混在する。と言うより、かなりの比率を占める。ウル出土の直剪鋸（すべてフリント製）がバーディアグループに属することは、明らかであろう。ウルクについても、同様のことが仮定できよう。

ただし、両グループの石材格差の一因として、黒曜石原産地（アナトリア高原）からの距離の問題も考慮する必要がある。事実、同じ農耕集落グループの中でも、原産地から遠いメソポタミア南部の遺跡では、黒曜石比が低下する傾向が認められる。マンダリ平原のチョガ・マミヤ、フジスターンのチョガ・セフィードなどが、それである。ウルは、これらの遺跡よりも更に南方に位置する。このことが、直剪鋸の石材選択に影響した可能性は否定できない。

しかし、この点で注目されるのが、フジスターンの遺跡群における石材比の推移である。

型式の石鋸が出土している [Woolley et al. 1955: Pl. 12 a, 13]。その近傍のウルクでも、様々な型式の石鋸が用いられたに違いない。では、数ある石鋸型式の中から、ウルク王は、なぜ直剪鋸を獅子狩りに用いたのであろうか。

ここでは、シナイ半島南端のグンナ遺跡群に着目してみよう。この遺跡群は、遊牧民の季節的集落（グンナ 25, 50, 100 号遺跡）と、その墓域であるナワームス（Nawamis=円形の積み石塚）によって構成されている。性格の異なるこの二つの地点からの出土状況を互いに比較することによって、直剪鋸の持つ意味を探ることができる。

グラフ（図 5）から分かるように、集落では石鋸（直剪鋸とそれ以外の石鋸の両方を含む）の比率が低い。50 号遺跡では約 8.3%，25 号遺跡では約 16.9%，100 号遺跡では約 8.0% である。多様な活動が営まれる集落で石鋸比が相対的に低いのは、ある意味で当然であろう。石鋸の中に占める直剪鋸の比率も、様々である。50 号・25 号遺跡では、それぞれ、71.9%・90.0% である。これに対して、100 号遺跡では 11.1% に過ぎない。こうした集落間のばらつきも、決して奇異なことではない。

しかし、ナワームス群では様相が一変する。フリント製石器を出土した 9 件のナワームスのデータを統合すると、石鋸が 80.7% を占めている。しかも、石鋸は直剪鋸だけであり、他のタイプの石鋸はまったく含まれていない。ナワームスへの副葬品として、直剪鋸が特に重視されたことは明らかである。これとほぼ同じことが、アイン・フデラ（同じくシナイ半島のナワームス遺跡）についても言える。ここでもやはり、直剪鋸が他の石鋸とは異なる扱

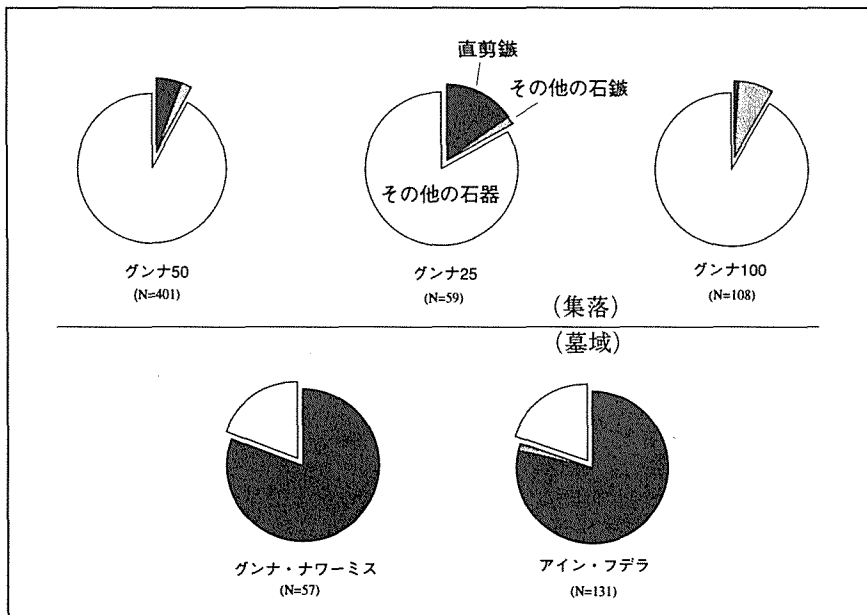


図 5 直剪鋸の石器内および石鋸内比率 (Bar-Yosef et al. 1977, 1986 のデータを基に作成)

いを受けていたことが分かる。

実は、土器新石器時代の直剪鋸についても、これと似た状況が認められる。例えば、テル・サビ・アビアド出土の直剪鋸のうち約90% (= 59/65) が、5層・第I号遺構の14号室南東隅床面から、一括して出土している [Copeland 1996: 306–307; Verhoeven et al. 1996: 72; Copeland & Ackermans 1994: 379]。他の型式の石鋸（ただし点数は多くない）には、これほどの偏りは認められない。イラク北部のヤリム・テベIIでも、特異な出土状況が報告されている。この遺跡の直剪鋸は、67号トロスのプラスター床面下の窪みから、彩文土器や護符などと共に一括出土している [Merpert & Munchaev 1993: 139]。

以上のことから分かるように、直剪鋸には、他の石鋸とは異なる特別な意味（おそらく威信財的な性質）が備わっていたように思われる。この点で興味深いのが、グナ＝ナワームスにおける墓の規模と直剪鋸の出土数との相関関係である。直剪鋸が多数副葬されたナワームスは、総じて大型である [Bar-Yosef et al. 1977, 1986]。無論、このことをもって直ちに直剪鋸を威信財と認定することはできない。と言うのも、ナワームスではしばしば追葬が認められるからである。直剪鋸の出土数は、あくまでも被葬者数（特に成人男子の被葬者数）との関係で捉えねばなるまい。とは言え、大型のナワームスに直剪鋸が集中していることは確かであり、この点はやはり示唆的であろう。

直剪鋸の威信財的な性格は、ヒエラコンポリス出土と伝えられる「狩猟図パレット」にも表れている（図1-c）。2列に並んだ狩猟者のうち、直剪鋸を行使して獅子を射ているのは、右端の1名のみである。弓を持つ者は他にも数名認められるが、彼等はなぜか矢を射てはいない。それどころか、上段中央の1名を除いて、矢を握ってすらいない（腰に矢筒らしき容器を下げているので、矢自体は携行していたのかも知れないが）。彼等が弓と共に握っているのは、（弓との組み合わせとしてはおよそ不釣り合いな）棍棒 mace や闘斧 battle-axe である。いずれにせよ重要なのは、（直剪鋸を装着した）矢を自由に行使し得る者が厳しく限定されていた、という点である。この点に、直剪鋸の威信財的な性格を読みとることが可能であろう。

とは言え、別の1名も直剪鋸を装着した矢を持っているという事実は見過せない。このことは、直剪鋸（より正確には、それを装着した矢）それ自体が確固たる威信財ではなかったということを暗示しているようにも思われる⁶⁾。むしろ、獅子などの大型動物を対象とした儀礼的な狩猟の実施こそが威信の源泉であり、そこでしばしば用いられたのが直剪鋸ということに過ぎないのかも知れない。直剪鋸は、その分だけ、威信財化しやすい性格を備えてい

6) この点で注目されるのが、グナ25号遺跡における直剪鋸の出土分布である。そこでは、各家屋から直剪鋸が少数出土している [Bar-Yosef et al. 1986: Fig. 4, Table 1]。特定の家屋への集中は認められない。従って、直剪鋸が威信財であるとしても、家族内での威信財（例えば家長としての威信財）に限定されることになるだろう。

たことになるが、それ自体が単独で威信財となり得るほど特殊かつ高価なものではなかった。現状では、こう考えておくのが最も妥当と思われる。

獅子狩りに際してウルク王が直剪鋸を用いているのも、それ自体が直接的に威信財であったからではあるまい。傷口が大きく、出血量の多い、しかも矢毒との組み合わせの容易な直剪鋸が、獅子狩りには最も有効であった。おそらくこのことが、直剪鋸を選択させた実際上の理由なのであろう。しかし、獅子狩りにしばしば用いられたということが、逆に、直剪鋸に対して一定の意味を付加したということも、十分あり得るのではないか。少なくともそうした文脈において、直剪鋸は多少とも威信財的な石鋸であったように思われる。

お わ り に

ウルク出土の「獅子狩り碑」に表された直剪鋸の系譜について、分布・型式・石材の、3つの視点から考察した。いずれの考察も決定打を欠いてはいたが、全体としての結論は明らかであろう。「獅子狩り碑」に表された直剪鋸は、どうやら、バーディアグループの系譜に連なるものと思われる⁷⁾。

しかし、このこととウルク王自身の出自問題はまったく別次元の事柄である。そもそも、「獅子狩り碑」に表現されているのがウルク王であるかどうかの問題が残されている。仮にそれがウルク王であったとしても、ウルク王の出自問題を直剪鋸の比較だけで論ずることは、無謀であろう。ここでは次のことだけを述べておきたい。ウルク王の出自問題の背景には、灌漑農耕民的な要素のみならず、ステップ遊牧民的な要素も潜んでいる。直剪鋸の系譜問題は、このことを、考古学的な物証を以て暗示しているのではないだろうか。

このことは、ウルク世界のパラダイムにも関係してくるであろう。ウルク世界のパラダイムは、肥沃な三日月弧の内部に割拠する都市および定住農耕集落によって構成されてきた[Qates & Oates 1976; Moorey 1990; Algaze 1993; Roaf 1990]。しかし、こうした定住民と併存するもう一つの次元として、バーディアの遊牧民世界を編入する必要がある。肥沃な三日月弧の中心点に位置するこの新たな次元の創設は、都市形成期のメソポタミアとエジプトとをダイレクトに連結していた可能性がある。「獅子狩り碑」に表された直剪鋸の系譜問題は、こうした展望へとわれわれを導いているように思われる。

しかし翻ってみると、直剪鋸自体の研究がまだ十分ではない。第一に、資料の見落としを危惧している。第二に、タウルス山脈以北・イラン高原以東の直剪鋸を加味する必要がある[Kozłowski 1999]。第三に、直剪鋸のサイズをより正確に比較しなければならない。しかし、

7) なお、本稿では言及する余裕がなかったが、ウルク王の用いた弓や矢羽の型式も、きわめて特徴的である。とりわけ矢羽は三叉に分かれたリボン状の形態を示しており、この点からもウルク王の系譜の一端に迫ることが可能であろう。こうした点については別稿で論ずる予定である。

最大の問題は、第3期直剪鏃全体の系譜および拡散の経緯であろう。本稿では、ウルク王の用いた直剪鏃がバーディアグループの系譜に連なるものでであろうということを論じたに過ぎない。では、都市形成期の直剪鏃はどこで起源し、どのように拡散・伝播したのか。これらの問題は未解決のままである。今後、順次補っていきたい。

〔謝辞〕 本稿は、第1回エジプト・パレスチナ研究会（2000年5月22日、早稲田大学）における筆者の口頭発表に追加・訂正を加えたものです。この研究会で有益なご意見をいただき、資料収集にもご協力いただいた、高宮いづみ・足立拓郎・須藤寛史氏ほかの出席者の方々に、お礼申し上げます。また、田辺勝美・大沼克彦・松本健・常木晃・西秋良宏・三宅裕・紺谷亮一・安部雅史・高橋文の各氏からは、アナトリア・シリア・イラク・イラン方面の直剪鏃について、情報を寄せていただきました。なお、この種の問題に関心を寄せるよう日頃から鼓舞していただいている前川和也・前田徹の両先生にも、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 足立拓郎（1997 a）レバント新石器時代の尖頭器の伝統『青山考古』14, 55-72.
- 足立拓郎（1997 b）レバント新石器時代の尖頭器の系統『青山考古』15, 55-97.
- 足立拓郎（2000）レヴァント地方先土器新石器文化B期前期の認定をめぐる——尖頭器の分析を基礎に『西アジア考古学』1, 73-88.
- Aldred, C. (1965) *Egypt to the End of the Old Kingdom*. London. (シリル・アルドレッド著, 屋形禎亮訳 1971『エジプト古王国』創元社.)
- Algaze, G. (1993) *The Uruk World System*. Chicago.
- Amiet, P. (1980) *Art of the Ancient Near East*. New York.
- Balkan-Atlı, N. (1995) A Preliminary Report of the Chipped Stone Industry of Degirmentepe, an Ubaid Settlement in Eastern Anatolia. In: *Readings in Prehistory*. Istanbul, 127-148.
- Bar-Yosef, O. (1981) The Pre-Pottery Neolithic Period in the Southern Levant. In: *Maison de l'Orient Méditerranéen* (ed.) *Préhistoire du Levant*. Paris, 555-569.
- Bar-Yosef, O., F. Burian & E. Friedman (1970) Transverse Arrowheads from the Coastal Plain. *Met'kufat Haeven* 10, 22-24.
- Bar-Yosef, O., A. Belfer-Cohen, A. Goren & P. Smith (1977) The Nawamis near Ein Hudera. *Israel Exploration Journal* 27 (2-3), 65-88.
- Bar-Yosef, O., A. Belfer-Cohen, A. Goren, I. Hershkovitz, O. Ilan, H. K. Mienis & B. Sass (1986) Nawamis and Habitation Sites near Gebel Gunna, Southern Sinai. *Israel Exploration Journal* 36 (3-4), 121-164.

- Basmachi, F. (1975–76) *Treasures of the Iraq Museum*. Baghdad.
- Betts, A. (1992) Tell el-Hibr, A Rock Shelter Occupation of the Fourth Millennium B. C. E. in the Jordanian Badiya. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 287, 5–23.
- Betts, A. (1993) The Neolithic Sequence in the East Jordan Badia, A Preliminary Report. *Paléorient* 19, 43–53.
- Betts, A. (ed.) (1998) *The Harra and Hamada*, vol. I. Sheffield.
- Betts, A. & S. Helms (1987) A Preliminary Survey of Late Neolithic Settlement at el-Ghirqa, Eastern Jordan. *Proceedings of the Prehistoric Society* 53, 327–336.
- Burian, F. & E. Friedman (1979) A Typology of Arrowheads and Sickel Blades and its Chronological Implications. *Met'kufat Haeven* 16, 1–16.
- Burian, F. & E. Friedman (1987) A Chalcolithic Borer Industry at Site 103 – Nahal Nitzana. *Met'kufat Haeven* 20, 160–172.
- Çambel, H. & R. Braidwood (eds.) (1980) *The Joint Istanbul-Chicago Universities' Prehistoric Research in Southeastern Anatolia*. Istanbul.
- Cauvin, J. (1968) *Fouilles de Byblos, tome IV, Les Outillages Néolithiques de Byblos et du Littoral Libanais*. Paris.
- Cauvin, M.-C. (1974) Flèches à Encoches de Syrie, Essai de Classification et d'Interpretation Culturelle. *Paléorient* 2 (2), 311–322.
- Clark, J. D., J. L. Phillips & P. S. Staley (1974) Interpretations of Prehistoric Technology from Ancient Egyptian and Other Sources, part 1, Ancient Egyptian Bows and Arrows and their Relevance for African Prehistory. *Paléorient* 2 (2), 323–388.
- Copeland, L. (1996) The Flint and Obsidian Industries. In: Akkermans, P. M. M. G. (ed.) *Tell Sabi Abyad: The Late Neolithic Settlement*. Leiden, 1285–338.
- Copeland, L. & P. M. M. G. Akkermans (1994) A Cache of 56 Flint Transverse Arrowheads at Sabi Abyad, Balikh Valley, Syria. In: Gebel, H. G. & S. K. Kozłowski (eds.) *Neolithic Chipped Stone Industries of the Fertile Crescent*. Berlin, 379–386.
- Currelly, C. T. (1906) Geble Musa & the Nawamis. In: Petrie, W. F. (ed.) *Researches in Sinai*. London, 242–244.
- Davies, N. de G. (1913) Five Theban Tombs. *Archaeological Survey of Egypt XI*. London.
- Dollufus, G., Z. Kafafi, J. Rewerski, N. Vaillant, E. Coquegniot, J. Desse & R. Neef (1988) Abu Hamid, an Early Fourth Millennium Site in the Jordan Valley. In: Garrard, A. N. & H. G. Gebel (eds.) *The Prehistory of Jordan, part ii*. Oxford, 567–601.
- Dunand, M. (1973) *Fouilles de Byblos V*. Paris.
- Emberling, G., J. Cheng, T. E. Larsen, H. Pittman, T. B. B. Skuldboel, J. Weber & H. T. Wright (1999) Excavations at Tell Brak 1998, Preliminary Report. *Iraq* 61, 1–41.
- Emery, W. B. (1938) *The Tomb of Hemaka, Excavations at Sakkara*. Cairo, Service des Antiq-

- uité de l'Egypte. Cairo.
- Forest, J.-D. (1996) *Mésopotamie, L'apparition de l'État VIIe-IIIe Millénaires*. Paris.
- Frankfort, H. (1954) *The Art and Architecture of the Ancient Orient*. London.
- 藤井純夫 (1997) 『家畜化過程の先史考古学的検証——レヴァント南部におけるヤギの家畜化とヒツジの導入について』博士論文, 東京大学大学院.
- 藤井純夫 (1998) 「肥沃な三日月地帯」の外側——ヒツジ以前・ヒツジ以後の内陸部乾燥地帯『世界歴史(第2巻, 古代オリエント)』岩波書店, 97-124.
- 藤井純夫 (1999) 群れ単位の家畜化説: 西アジア考古学との照合『民族学研究』64 (1), 28-57.
- 藤井純夫 (2000) 西アジアの先史美術 田辺勝美・松島英子(責任編集)『世界美術大全集』東洋編 第16巻(西アジア) 小学館, 333-342.
- Fujii, S. (2000) Qa' Abu Tulayha West: An Interim Report of the 1999 Season. *Annual of the Department of the Antiquities of Jordan* (forthcoming).
- 藤井秀夫編 (1981) テル・ソングル B, C 『ラフィダーン』II, 75-96, 99-105.
- Fukai, S., K. Horiuchi, & T. Matsutani (1973) *Marv Dasht III: The Excavations at Tall-I-Mushki*, 1965. Tokyo.
- Garstang, J. (1953) *Prehistoric Mersin*. Oxford.
- Gopher, A. (1994) *Arrowheads of the Neolithic Levant*. Winona Lake.
- Gopher, A., N. Goring-Morris & D. Gordon (1995) Nahal Issaron, The Lithics of the Late PPNB Occupation. In: Gebel, H. G. & S. k. Kozlowski (eds.) *Neolithic Chipped Stone Industries of Fertile Crescent*. Berlin, 479-494.
- Goring-Morris, N. (1993) From Foraging to Herding in the Negev and Sinai, The Early to Late Neolithic Transition. *Paléorient* 19 (1), 65-89.
- Goring-Morris, A. N. & A. Gopher (1983) Nahal Issaron, a Neolithic Settlement in the Southern Negev, Preliminary Report of the Excavation in 1980. *Israel Exploration Journal* 33, 149-162.
- Goring-Morris, A. N. & A. Gopher (1978) Nahal Issaron——a Neolithic Site in the Southern Negev. *Qadmoniot* 20, 18-21.
- Hayes, W. C. (1953) *The Scepter of Egypt, a Background for the Study of the Egyptian Antiquities in the Metropolitan Museum of Art, part 1, From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom*. Cambridge.
- Hole, F. (1977) *Studies in the Archaeological History of the Deh Luran Plain*. Ann Arbor.
- Hole, F., K. V. Flannery & J. A. Neely (1969) *Prehistory and Human Ecology of the Deh Luran Plain*. Ann Arbor.
- Holland, F. W. (1870) *Sinai and Jerusalem, Scenes from Bible Lands*. London.
- Holland, F. W. (1871) *The Recovery of Jerusalem*. London.
- Howe, B. (1983) The Jarmo Chipped Stone. In: Braidwood, L. S., R. J. Braidwood, B. Howe, C. A. Reed & P. J. Watson (eds.) *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*.

- Chicago, 233–288.
- Ingholt, H. (1970) *Tell Shimshara: The Hassuna Period*. Copenhagen.
- 近藤二郎 (1989) エジプト先王朝期の石鋸に関する問題点『オリエント』32 (1), 108–118.
- Kozloff, B. (1972/ 73) A Brief Note on the Lithic Industry of Sinai. *Museum Ha'arez Yearbook* 15/ 16, 35–49.
- Kozlowski (1999) *The Eastern Wing of the Fertile Crescent*. Oxford.
- Krolik, H. (1999) Excavations at Sinai-32, The Megrah Site, Tabieq Locality. In: Eddy, F. W. & R. Wendorf (eds.) *An Archaeological Investigation of the Central Sinai, Egypt*. Boulder, 221–253.
- Lev-Yadun, S., F. Burian & E. Friedman (1989) A Stone Figurine from the Vicinity of Nahal Ruth in the Western Negev. *Mitekufat Haeven* 22, 78–81.
- Masson, V. M. & V. I. Sarianidi (1972) *Central Asia: Turkmenia before the Achaemenids*. London.
- Matsutani, T. (ed.) (1991) *Tell Kashkashok: The Excavations at Tell No. II*. Tokyo.
- Merpert, N. Ya. & R. M. Munchaev (1987) The Earliest Levels at Yarim Tepe I and Yarim Tepe II in Northern Iraq. *Iraq* 49, 1–36.
- Merpert, N. Ya. & R. M. Munchaev (1993) Yarim Tepe II: The Halaf Levels. In: Yoffee, N. & J. J. Clark (eds.) *Early Stages in the Evolution of Mesopotamian Civilization*. London, 129–162.
- 増田精一 (編) (1977) 『タペ・サンギチャハマック』イラン先史遺跡調査団.
- Miller, R. (1983) Chisel-ended Arrowheads from Tell Hadidi, Syria. *Bulletin of the Institute of Archaeology, London* 20, 187–190.
- Miller, R., C. A. Bergman & I. Azoury (1982) Additional Note on Reconstructing Aspects of Archery Equipment at Shams ed-Din Tannira. *Berytus* 30, 53–54.
- Moorey, P. R. S. (1990) From Gulf to Delta in the Fourth Millennium BCE, The Syrian Connection. *Eretz-Israel* 21, 62–69.
- Moortgat, A. (1969) *The Art of Ancient Mesopotamia*. London.
- Mortensen, P. (1973) A Sequence of Samarran Flint and Obsidian Tools from Choga Mami. *Iraq* 35, 37–55.
- Mortensen, P. (1982) Patterns of Interaction between Seasonal Settlement and Early Villages in Mesopotamia. In: Young, T. C. Jr., P. E. L. Smith & P. Mortensen (eds.) *The Hilly Flanks and Beyond*. Chicago, 207–229.
- Nishiaki, Y. (1993) Anatolian Obsidian and the Neolithic Obsidian Industries of North Syria, A Preliminary Review. In: Price Mikasa T. (ed.) *Essays on Anatolian Archaeology*. Wiesbaden, 140–160.
- Oates, D. & J. Oates (1976) *The Rise of Civilization*. New York.
- Olami, Y., F. Burian & E. Friedman (1977) Givat Haparsa, A Neolithic Site in the Coastal

- Region. *Eretz Israel* 8, 34 – 47.
- 小野山 節 (1985) メソポタミアの美術 I 新規矩男 (責任編集) 『大系世界の美術』第 2 巻 (古代西アジア美術) 学習研究社, 65 – 75, 82 – 95.
- Oren, E. D. & I. Gilead (1981) Chalcolithic Sites in Northeastern Sinai. *Tel Aviv* 8, 25 – 44.
- Palmer, E. H. (1871) *Desert of Exodus*. London.
- Perrot, J. (1952) Têtes de Flèches du Natoufien et du Tahounien (Palestine). *Bulletin de la Société Préhistorique Française* 49, 439 – 449.
- Postgate, J. N. (1992) Early Mesopotamia. London and New York.
- Prausnitz, M., F. Burian, E. Friedman & E. Wrescher (1970) Excavations in the Site Herzliya, 1969. *Mitekufat Haeven* 10, 11 – 16.
- Pullar, J. (1975) *The Neolithic of the Iranina Zagros*. Ph. D dissertation. University of London.
- Pullar, J. (1990) *Tepe Abudul Hosein, A Neolithic Site in Western Iran, Excavations 1978*. Oxford, BAR.
- Roaf, M. (1990) *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*. Oxford. 松谷敏雄監訳 (1994) 『古代のメソポタミア』朝倉書店.
- Rosen, S. (1983) The Microlithic Lunate: An Old-New Tool Type from the Negev, Israel. *Paléorient* 9 (2), 71 – 83.
- Rosen, S. (1984) Kvish Harif, Preliminary Investigation at a Late Neolithic Site in the Central Negev. *Paléorient* 10 (2), 111 – 121.
- Rosen, S. (1997) *Lithics after the Stone Age*. Walnut Creek.
- Roubet, C. (1979) *Économie pastrale préagricole en Algérie-Orientale, le Néolithique de Tradition Capsienne*. Paris.
- Saidel, B. A. (1998) *Arid Zone Pastralists in the Early Bronze Age in the Southern Levant*. (Ph. D. Thesis for Harvard University). Ann Arbor.
- Smith, W. S. (1946) *A History of Egyptian Sculpture and Painting in the Old Kingdom*. Oxford.
- Solyman, T. (1968) *Die Entstehung und Entwicklung der Götterwaffen im alten Mesopotamien und ihre Bedeutung*. Beirut.
- Unger-Hamilton, R. (1988) *Method in Microwear Analysis: Prehistoric Sickles and Other Stone Tools from Arjoune, Syria*. Oxford.
- Vandier, J. (1952) *Manuel d'Archeologie Égyptienne, vol. I, Les Époques de Formation, la Préhistoire*. Paris.
- Verhoeven, M., P. Kranendonk & N. Aten (1996) The Excavations: Stratigraphy and Architecture. In: Akkermans, P. M. M. G. (ed.) *Tell Sabi Abyad: The Late Neolithic Settlement*. Leiden, 25 – 118.
- Voigt, M. M. (1983) *Hajji Firuz Tepe, Iran: The Neolithic Settlement*. Philadelphia.
- 和田久彦 (1987) ビブロス型尖頭器とイエリコ型尖頭器, その成立と展開をめぐって 『岡山市立オリエント美術館研究紀要』6, 1 – 45.

- Watson, P. J. (1983) The soundings at Banahilk. In Braidwood, L. S., R. J. Braidwood, B. Howe, C. A. Reed & P. J. Watson (eds.) *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*. Chicago, 545 – 613.
- Woolley, L., M. A. D., Litt, LL. & D., Hon (1955) *Ur Excavations, vol. IV, The Early Periods*. Philadelphia.
- Woolley, L. & M. Mallowan (1976) *Ur Excavations, vol. II, The Old Babylonian Period*. Philadelphia.
- Wright, H. T. (1981) *An Early Twon on the Deh Luran Plain*. Ann Arbor.

(金沢大学文学部)